

県中教研 道徳部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 柳原 昌人
題 字 金山 泰仁 先生

生徒を評価するに当たって

指導主事 小林 仁美

先日「二人の弟子」を教材にした授業を参観した。「白百合を見て涙を流しながら立ち尽くす智行はどのような思いだったのだろう」という発問に、生徒は「光に照らされるとこうも美しいのに、それを妨げようとしていた自分への反省。白百合に道信を重ねて見ていた。」と答えた。今まで白百合は人間の気高さの象徴だとしてしか考えてこなかった私にとって、この生徒の発言にみられる具体的なイメージは新しい発見であり、心打たれるものがあった。友達のこの発言に何か感じるところがあったのか、授業が進行しても、この発問にこだわって、ワークシートに向かって最後まで書き続けている生徒の姿がみられた。

もし私が授業者であったとしたら、このクラスの生徒にどのように対応していただろう。自らを振り返って考えると、想定外の発言に戸惑い、その発言のもつ意味を理解しないまま、自分の言いたいことを伝え、自分のやりたいような段取りで指導し授業の体裁を整えていたことがあった。そんな自分が、自分の枠を超えている生徒たちの評価をいざ書くとすると、どのようなことが書けるのだろうか。

生徒も教師も、これまでの人生経験を踏まえて道徳的な価値に対する自分なりの考えをもっているが、それは普段はみえるものではない。しかし、この授業のように「発問」によって心が揺さぶられ、「他者の考え」に衝撃を受けたとき、自分自身の答えを探し求め、自分の考えに自分で問いかけ、吟味したり表現したりしようとする。これこそが道徳科の授業で目指したい姿ではないだろうか。そして、教師は、自分も生徒とともに考え続ける未熟な存在なのだという自覚をもちつつ、考え続けている生徒を応援し、理解に努めていかなければならない。

今、評価に当たって、生徒に対する教師の理解の深さが試されているということ、この授業を通して改めて感じた。

(東部教育事務所)

自分の生き方を見つめる道徳の授業

部長 柳原 昌人

昨年11月、県内小学校の校内研修として、大阪の公立小学校の校長先生を招き、道徳公開示範授業が実施されると聞き、どんな授業をされるのか楽しみに参加した。講師の校長先生と5年生児童とは初対面、授業が始まる前の僅かな時間を使って、児童と楽しく対話をしながら、「道徳の授業は自分の生き方について考える時間なんだ」と熱く話された。この瞬間、教室に教材を通して自分を見つめようとする空気が生まれた。

授業では、学ぶべき点がいくつもあった。その一つは、先生は児童の発言を大切にし、一人一人の考えをしっかりと聞いて、認める声かけをしておられた点である。児童が安心して発言するには、「どんな考えを発表しても大丈夫」といった教師の姿勢と学級の雰囲気は欠かせない。先生の「いいねえ」「なるほど」といった、一人一人の考えを認め励ます声かけが児童に安心感を与えていた。

もう一つは、中心発問に十分すぎるほどに時間をかけておられた点である。ねらいとする道徳的価値に迫るために、「それってどういうこと?」「他に考えは?」と何度も問うておられた。多様な考えに触れることで、考えが広まり、そこからまた新たな考えが生まれていた。時間をかけて子供の考えを引き出すことで、ねらいとする道徳的価値へと考えを深めていくことができると感じた。

授業の主役は、生徒である。教師は生徒の考えを引き出すファシリテーター役である。よいファシリテーターとなるためには、どれだけ教材分析を行ったかにかかっている。大阪の先生も、ありとあらゆる子供の反応を予想して授業を構想したと話しておられた。授業後に「考えることが楽しかった」「自分のこととして考えられた」といった声が聞こえる授業を仕組むためには、発問に対する子供の声を想像しながら、ねらいとする道徳的価値にどのように迫るのかを十分に検討して授業に臨む必要がある。そうすれば、ぶれない授業が展開できる。

(高・国吉中)

第63回 研究大会報告

東 部 地 区

富山市立山室中学校

<第1学年> 村崎 凌也 教諭

主題 誠実に責任をもつこと A

教材 「ネット将棋」(出典:私たちの道徳)

勝負の結果を自己の責任として受け止めようとしない不誠実な「僕」と、対照的に描かれている「敏和」や「明子」の行動や考え方を、話の内容を丁寧に追いながら対比した。中心発問を小グループ内で検討することで、生徒は主人公の気持ちを考えながら自己の考えを整理し深めることができた。

部会協議では、伊勢威知郎指導主事(東部教育事務所)から以下の助言をいただいた。

- ・生徒と授業者、生徒同士の関係性がよく、生徒は安心して活発に発言し、全体に意見が広がった。
- ・振り返りの発問は、「どうして」「どう思ったか」等シンプルなものにすると、自分と「僕」を対比させ、自己を振り返るきっかけとなる。
- ・支援を必要とする生徒へのアプローチのために学校行事と関連付ける方法もある。



川上久美子(中・上市中)

<第2学年> 杉本 裕美 教諭

主題 遵法精神・公德心 C

教材 「傘の下」

授業はテンポよく時間を区切って行われ、丁寧な机間指導が意図的指名に生かされていた。ワークシートは、最初と最後に感想欄を設けることで、考えの変化が分かるように工夫されており、自分の考えを整理する時間が確保されていた。終末では、「なぜ自分たちの傘を学校の傘立てに置くことができるのか」と問いかけることで、一人一人がルールを守ることで安心して生活ができるのだと自分事に置き換えて捉える工夫がされていた。また、板書では、生徒たちの意見の上に傘の絵を描くことで、「法」という傘の下で自分たちは守られているというイメージがわくような視覚的な工夫がされていた。部会協議では、小林仁美指導主事(東部教育事務所)から以下の助言をいただいた。

- ・構造的に示された板書が思考を深めるきっかけとなっていた。
- ・意見が活発に出る学級である。考え、対話する時間を多く設け、生徒の発言で組み立てていく授業を目指したい。
- ・教材を分析し、生徒に何を考えさせるのかを吟味する。発問が授業に山場をつくる鍵になっている。
- ・教材分析の結果は可視化して記録に残すと、研究協議に役立ち、次につながるだろう。



稲澤 郁美(黒・高志野中)

<第3学年> 福島 あゆみ 教諭

主題 思いやりの心 B

教材 「月明りで見送った夜汽車」

文化祭の準備を中座して夜汽車に乗ったI先生の心情や、I先生を思いやって、教室の電気を消したY先生の人柄を考えることを通して、思いやりの大切さを理解することをねらった授業であった。生徒は、構造的な板書や小グループでの話し合いにより、互に関わり合いながら考えを深めていた。また、「Y先生の行動に対して歓声を上げた周囲の人たちはどのようなことを考えていたのだろう」という中心発問では、「自分がされたわけではないのに、胸が熱くなった」等、Y先生の思いやりが当事者だけでなく、集団に広がったことを捉える発言がみられた。

部会協議では、道徳的価値の理解を深めるための手立てに関して活発な議論が行われ、砂土居良江主任指導主事(西部教育事務所)から以下の助言をいただいた。

- ・中心発問をした際には、道徳的価値の自覚の深まりが期待される反応を取り上げ、学級全体で共有することが有効である。
- ・発問に対する反応例を豊かに考え、生徒にどう問うのか、十分に吟味することが大切である。



木村さやか(下・入善西中)

〔研究主題〕 主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。 —互いに関わり合って道徳的価値の理解を深め合う学習活動—

西部地区

射水市立新湊中学校

＜第1学年＞ 杉木 貴昭 教諭

主題 誠実な行動 A

教材 「裏庭でのできごと」

導入では主人公の心情を理解するために、役割演技が取り入れられていた。中心発問では、ペアインタビューを行うことで、主人公の葛藤や決断について自分の考えを深められるよう工夫されていた。また、黒板上に生徒一人一人の意見を位置付けるとともに、互いの共通点や相違点に気付くことができるよう配慮されていた。1時間の授業を通して、最後まで生徒が集中して考え、終末の振り返りでは、自分の問題として意欲的にワークシートに記入する姿が印象的であった。



北島由紀子指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・道徳の内容項目は、小学校1年生から9年間系統的に取り扱う。同じ内容項目を、中学生で扱う際小学校とは異なるしかけが必要である。今回の授業では、最初の役割演技と、インタビュー形式のペアトークが効果的な方法となっていた。
- ・教材に書かれていない言葉を使って生徒が話しているのは、道徳的価値について自分との関わりで考えているかという視点の一つになる。
- ・「何に気付かせたいのか」という指導観が最初にあって、次に方法がある。指導者が授業のねらいについてぶれないことが大切である。

下村 喜一（小・蟹谷中）

＜第3学年＞ 長谷川 香 教諭

主題 目標に向かってあきらめずに挑戦する強い意志 A

教材 「片足のアルペンスキーヤー・三澤拓」

導入では、困難を強い意志によって乗り越えてきた三澤選手の人生を、映像を通して捉え、中心発問へつなげていた。一人一人の意見を構造化された板書で整理し、視覚的に多面的・多角的な考えが共有できるように工夫されていた。終末では、選手本人からのメッセージを視聴し、自分のこれからの生き方について考える意欲を高めていた。

高岡陽子指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

- ・映像等を使う場合は、授業のねらいとずれないように留意すべきである。今回は選手本人と授業者が何度も打ち合わせたものであり、有効に働いていた。
- ・主題とした内容項目だけでなく、関連する内容項目にも着目しておくことが大切である。板書の構造化にも生かしてほしい。
- ・問い返しの発問は、自分のこととして置き換えて考えさせるチャンスである。道徳的価値の本質的な理解や新たな気付きにつなげる場としてほしい。



塚田 香織（南・井波中）

授業力向上のためのアドバイザーによる講義〈要旨〉

第63回東部地区大会

令和元年度東部地区大会では、金沢工業大学基礎教育部教職課程の白木みどり教授に、アドバイザーとして「『特別の教科 道徳』の授業づくりと評価」と題して講演をしていただいた。

1 はじめに

これまで共感型の授業や時系列で心情を考えていく授業が主流であったが、現在は、「主体的・対話的で深い学び」を通して、道徳的価値を捉え直すために、考え議論する道徳、対話的議論を意図的に設けることが望まれている。

2 授業づくりのポイント

成長とともに思考の質が変わることを考慮し、何をねらいどこまで深めるのか、教材と学習指導要領を読み込み、思考課題を明確にすることが大切である。中心発問は、「～をどう思う。」「～は、どうして(なぜ)。」「～は、どうしたらよい。」等、アクティブ・モラル・ラーニングのシンプル基本発問を参考にするとよい。

教師は話合いのファシリテーターである。話し合いたいくなる材料の提示、話し合う課題の明確化、話合いのルールの共通理解、そして、話し合える雰囲気づくりをしなくてはならない。また、生徒の言葉を教師が言い換えたり、まとめたりしない。書いたものを発表させるだけでなく、話し合う時間をもっとつくることで、生徒は多様性に出会い、自分の中に取り込み再構築していく。

3 道徳科の評価

生徒の学習状況や道徳性に係る様子を継続的に把握し、一人一人がどのように変容、成長をしているかを評価する。指導と評価は一体化している。ねらいと一致する中心発問であるか、ねらいと着地点の整合性がとれているかが重要である。これらが備わって初めて評価できる。生徒が道徳的価値観を自分事として捉えられれば、評価もしやすくなるであろう。

今一度誰のための授業なのかを考え、生徒の自由な思考の流れから議論の種を拾い、生徒の声に耳を傾け、対話を楽しむ。その意識を忘れず、焦らず力まず、道徳科の授業を楽しむことが大切である。

船木 雅子(富・南部中)

第63回西部地区大会

令和元年度西部地区研究大会では、國學院大學教育開発推進機構教授の澤田浩一先生に、アドバイザーとして「温かい授業と評価」と題してご講演いただいた。

1 道徳科の評価とは

道徳科の評価の対象となるのは、自分のこととして自分との関わりで考えているかという点と、友達との話合いの中で他者の意見を聞いて考えているかどうかという学習状況のところである。「道徳性」は目に見えない。学習を通して、おそらく道徳性が育っているに違いないと考えられるその状況を評価の対象とする。

2 授業実践によせて

道徳の教材は人生を味わう糧となるものであり、よく読み、新鮮な「問い」を工夫して生徒を引き込んでほしい。そのために、「小・中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」、特に内容項目の概要と指導の要点を読み、道徳的諸価値を理解して授業を行う。授業では、この道徳的諸価値の理解が、子供たちが生き方を考えるときの枠組みとなる。道徳科で、主体的に行動するための基となる道徳性を育成し、子供たちの心のはたらし(道徳性)をよりよくしていきたいものである。

実践を重ねることで授業がうまくなる。同じ教材でのローテーション授業や教員のもち味を発揮できるような年間指導計画の立案も有効である。また、生徒の発言は内容よりもその「想い」を重視する。子供たちのよさ、喜ぶ姿をどう授業の中で発揮させるかを考え、授業を組み立ててほしい。

3 授業の中での生徒の見取り・評価

個々の生徒のよさに目を向けて把握しようとする評価を心がける。生徒なりに自己教育しようとする姿や意志を見て、力を貸し、後押ししようとする評価を行ってほしい。評価は生徒を愛する教師の姿を表現するものである。生徒のわずかな成長も見逃さずに喜び、見取る教師でありたい。

畑井 綾乃(射・小杉中)